［特集］中里中吹奏楽部

見つめる先にあるもの

平成元年に中里中が開校したときから存在する吹奏楽部。数ある部活動の中でも人気が高く、同校を代表する部の１つだ。今年の春に取材したときは、33人の女子部員が所属し、日々の練習に励んでいた。

町民祭のほか、町の行事でたびたび登場し、素敵な演奏を聴かせてくれる彼女たちの華やかな舞台裏を紹介しようと、取材したのは今年の春。そこで出会ったのは、青春まっただ中の彼女たちが見せる、まっすぐな「まなざし」だった。

そのとき思った。取材するのは彼女たちの“目”だ、と。

Passion 熱 コンクールへと向かう

桜も散り、田植えが本格化していたころ、部員たちはコンクールに向けての練習に励んでいた。７月に行われる「県吹奏楽コンクール弘前地区大会」は、彼女たちにとって最大の目標。新入部員の１年生にとっては、わずか３か月ほどで挑まなければならない緊張のステージだ。

そのせいもあってか、顧問の川村先生の指導には熱が入っていた。

「ちゃんと練習してきたのか！」「何度言ったら分かるんだ！」「ダメ、ダメ。こんなんじゃ全くダメ！」

容赦ない言葉が彼女たちを射貫く。ときには、１小節進むのに10分、20分と時間をかけて練習していた。しかし、それにめげている部員は１人もいない。必死に食らいつき、理想の演奏に向かって１音１音絞り出していく。この練習風景には、熱を帯びた圧倒される雰囲気があった。

川村先生は「やればやるほどうまくなるんだから、子どもたちにはそのぐらいで満足してほしくない、という気持ちがある」という。音楽には「これでいい」というゴールがないゆえ出た言葉だった。

Color
色

先生と彼女たちと楽器の個性が奏でるハーモニー

吹奏楽は、1人ではできない音楽。どんなに自分がいい演奏をしても、ハーモニーとなって聴衆に伝わらなければ、美しい音色にならない。

木管・金管・打楽器それぞれに個性があり、それらを操る生徒たちや先生も、強い個性の持ち主だった。こんな違うことだらけの集まりなのに、一緒に演奏したときの音は、まさしく美しいハーモニーになる。

戸来裕紀②

曲のリズムは、打楽器奏者がすべて決める。この存在がなければ、バンドは方向性を失う。▶

パーカッション *Percussion*

小林静花②　西村聖菜③　藤本優利①

小野杏莉②
古川真衣①

低音を担当する3種の楽器。バンドの音を引き締める役割を持ち、演奏に厚みを加える。▶

テューバ＆ユーフォニアム＆コントラバス
Tuba & Euphonium & Contrabass

江良貴保子②　原田千夏①　島ゆきの③
大川真由①　鈴木萌生②

◀伸びやかな音が特徴の中音楽器。心地よい人間味あふれる音は、ソロでも大活躍。

サックス *Saxophone*

荒関朱梨③　野上遥奈③　工藤花奈②
三上沙英①

名前は写真左から
○数字は学年

◀ ステージ上でソロが多く、華やかな楽器。高音が多く、奏者の情感的な吹き方が特徴。

トランペット *Trumpet*
石沢千帆②　石川萌③　藤崎彩①

▶ バンドの音に力強さを与える中音の楽器。U字管の伸縮のみで音程を操る。

トロンボーン *Trombone*
齋藤真那③　中谷紗希③
秋谷菜々①

高音から低音まで幅広い音を出す楽器。優しい旋律を奏でるその音色が魅力。

◀

ホルン *Horn*
宮本真衣①　吉田成美②　佐々木玲子②
谷紗弥子③

▶ バンドの中でも重要な位置を占める音域の広い楽器。音の繊細さから、多くの奏者が必要になる。

クラリネット *Clarinet*
三上李奈②　佐野聖①
小寺菜々歌②　澤田未希②

主旋律を刻む落ち着いた音が特徴の高音楽器。その演奏姿勢もあり、とても優雅に見える。

▼

フルート＆ピッコロ *Flute & Piccolo*
工藤あいり①　鈴木美早紀②　木村美結②
高松沙智香③

副顧問 *Advisor*
福沢恵利子 先生

指揮者 *Conductor*
川村敏広 先生

こんなポーズも先生の演出

練習の成果が試されるコンクール当日。彼女たちの目には緊張の色が見える。

出場するのは、50人までの編成で行う大編成部門。従来、中里中の人数では、小編成での出場が一般的であったという。それが、大規模校の作戦などで意図的に小編成部門での出場が相次いだことから、前年の1・2年生の部員数で出場部門を限定されるようになり、中里中は規定上、大編成部門での出場となった。この部門では、50人出場させることができる大規模校の方が有利で、中里中にとっては厳しい戦いが予想される。

そんなコンクールのチューニング室に、川村先生は遅れてタキシード姿で入ってきた。生徒たちが普段見慣れない先生の正装に、ちょっと吹き出す。

「先生、かわいい」「なにそれー、先生」

あとから聞いたが、遅れて入ってきたのは〝演出〟だったそうだ。川村先生はこのあとも、生徒たちの緊張を感じたせいか、楽器を手にせず「声」で演奏させたりした。緊張や気負いで、失敗してきた学校をたくさん見てきたからだという。

いよいよ本番。緊張の色が隠せない。

Gallant

凜

いざ勝負の舞台へ

本番の演奏は、素晴らしいものだった。

舞台に立った彼女たちは凜として、その振る舞いは堂々たるものだった。何度か練習を取材し、徐々に完成度が上がっていく様を体感していたが、本番での演奏はその中でも最高だったと思う。

結果は銅賞。他校との比較で賞が決められる審査では、1年生も全員出場する中里中にとって、上位進出は非常に難しいことだった。だが、川村先生はこの日の演奏をこう振り返った。

「以前、中里中を率いて県大会へ行ったこともありましたが、それらを含めても今年の演奏は、指揮した中で文句なく最高の出来でした」

限りなく銀賞に近い銅賞であったことは言うまでもない。生徒たちも先生も、負けた表情ではなかった。